

道心



懺悔してこそ 救われる！

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義第二章 「懺悔滅罪」

仏祖憐れみの余り広大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を証入せしめんが為なり、人天誰か入らざらん、彼の三時の悪業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは、重きを転じて軽受せしむ。また滅罪清浄ならしむるなり

前号までの、修証義第一章は仏教の概要が説かれ、自己の目覚めが促されていきました。

仏教はお釈迦様が人間の命を「本来自性・天然自性身」(一切衆生は本来そのまま仏)とお覚りになったことに始まりました。

そのお覚りを説法されたことを弟子から弟子へと口伝された諸説を後の時代の求道者達が仏教聖典として記録に残したものが教典となったのです。ですから多くの教典に「如是我聞」(我々の如く聞く)と始まる箇所が多くあるのです。

お釈迦様のお覚りに対して、私達人間の本質は強欲で自分よがりの生き方をします。

仏道を修行するということは、この人間の傲慢や強欲な煩惱に苦しむ自己と向き合つて、お釈迦様の覚りから生まれた御教えを拠り所として、己を返照(心の奥深くを照らし見る意)することです。

現代はインターネットを始め情報源が沢山ありますから、わざわざお寺へ来なくても仏教並びに宗教の知識を得ることは出来ます。しかしその知識の受け止め方が自分よがりに学ぶ受け止め方では、仏教(宗教)に学ということにはなりません。

ある方がよく読書をされ道元禅師の御教えにも帰依されているようには見受けられますが、私とは良く意見が対立していました。その対立の元には自分よがりの解釈があるからです。もちろん私も絶対ではありません。しかしご自分なりの理解をもたれて、上から

振りかざされるような物言いをされますと「そうかそうか」「ふんふん」なるほどなるほど」と、その意見を肯定もしないが否定もしない返事をするしかありません。意見を返さなくなった私を、この方は「和尚は今頃人間的に丸くなってきた」と周囲の人に言っています。私に對するご本人の態度には「疑心暗鬼」で接していることが伺えるのです。

真の安心を得るには禅問答に象徴されるように、キャッチボールのごとく、求道の疑問を投げかければ答えが返される相手が有つて「自己を返照」することが出来るといえるでしょう。修行道場での修行は優れた師を求めると共に事事物物に巡り会つて「自己を返照」することが大事なのです。

その仏道の入り口が「懺悔滅罪」なのです。「仏様やお祖師様は憐れみを深くされて、広く大きな慈悲の門を開いてお待ち下さっている、是は一切衆生(善悪・偏見・差別なしの世界)を自己の本性に目覚めさせんが為に、罪業深重の者であろうと懺悔すれば、仏の慈悲に包まれて、重きを転じて軽受せしめ、罪を滅して清浄ならしむるなり」と

仏道への証入(めざめ)を促されておられるのであります。

あなたがいいことをしたら、 すぐに忘れなさい。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

今回も、良寛さまの

『戒語』九十カ条のうちの

いくつかを選んで、

あなたと一緒に

考えてみたいと思います。

まずは、もつとも

自戒したいことから……。

一、人のかくす事を、 あからさまに言う

無量寺の参禅会の会員たちが、私の還暦のお祝い会をしてくださった時のことです。そうして皆さんが一堂に揃って食事をするのは初めてでしたから、参会者の自己紹介からはじまりました。

一人一人が立ち上がり、「私はこんなことがあって先生にご縁をいただくようになりました」

「私はひどく悲しい目に遭ったのがきっかけとなつて、参禅会に来はじめました」

などと語って座ります。皆の言葉を聞きながら、一つのこと気づきました。

もつともつらく悲しいことは、 人に言えない

参禅会員の中で半分ぐらいは、人生相談に來られたのが機縁となつている方々です。その時にお聞きしたお話の中身はおおかた忘れてしまつておりますけれども、あまりにつらく悲しい内容であつた場合は、よく覚えておられます。しかしその人にとっていちばんつらく、いちばん悲しくこれだけはせひ聞いてほしいという点だけは、誰も言いませんでした。そして二番目三番目ぐらいつらいことはサラツとお話になる、ということに気づいたのです。

いちばんつらいこと、大声をあげて叫びたいはずのことはそう簡単に口には出せないのだな。人前で簡単に口に出せるのは二番目三番目の悩みなんだな、と……。

だからといって聞かないでよいのではない、気づかないでよいのではない。言葉にも出せない、反対に明るく道化した態度をとつてか、あるいは反発や強がりの姿でしか表に出せない、心の深みにうずき続ける痛みや悲し

みやつぶやき。それを聞きとる大きな耳こそが必要なんだな——という思いにかられました。皆さんがお寺に行つて拝む仏さま——仏像の耳は、不自然なほど大きくつくられておりますね。

人の心の悲しみを、言葉にもあらわせない痛みを、うめきを、もらさずに聞きとり、心を安らかにしてください、生きる勇気を与えてくださる、そういうお方を象徴的に表現した時、大きな耳の仏さまになつたのでしよう。

皆さんご存じの観音さまの正式なお名前は、觀世音菩薩といひます。

『世音』を『觀』ず、つまり声なき声を含む世の中すべての声を聞きとり、受け止めてくださるお方が、觀世音菩薩なのです。

この觀音さまと正反対の言動をなさる方が時々いらつしやいます。

心の深みの悲しみ、そつとしておいてほしい痛みを、ことさらにあばき、白日のもとにさらし出し、しゃべりまくる人のことです。かたわらで聞いているだけでも胸がキリキリと痛みます。だからこそ良寛さまは「人のかくす事を、あからさまに言う」ことをつしめ、とおつしやつておられるのです。

自分の非を認められるのが大人

一、悪しきと知りながら 言い通す

皆さんも思いあたることはありませんか。自分で悪かつたと気づいても、自分の面子が立たないような気がして、素直に「悪かつたと、その非を認めることができませぬ」

精神的に大人になつていない証拠といえましよう。

相手が先輩であろうと後輩であろうと、自分より年下であろうと、あるいは我が子であろうと教え子であろうと、相手のほうが正しくて自分のほうがまちがつていたなど気づいたら、ただちにその非を認めて誤ることができると、大人といえます。「吾に大力量底あり。風吹かば倒る」

という禅の言葉がありますが、小人は決して負けることができません。負けることができるというのは、大力量の人といえましよう。小人にとつて大切なことは私の面子であり、従つて勝ち負けだけが問題なのですが、精神的に円熟した大人にとつて問題なのは、そのことが是非か非かであつて、私が勝つか負けるかなどということはどうでもよいことなのです。

一、手柄話

自慢ばなしというのは、とても聞きにくいものです。年をとつて未来への夢が持てなくなり、過去の思い出の中に生きることが多くなると、人はとかく過去の自慢ばなしに花を咲かせがちです。人を褒めるのはよいが、自分の自慢ばなしは耳障りなものです。

一、呉れてのち、人にその事をかたる

物でも行為でも、さいわい人さまのためにためという言葉は好きではないのです

が——何かをさせていたことができたら、「させていたことができた」というそのこと自体に感謝し、あとは忘れてしまふことです。ところが、なかなかこれができません。いつまでもいつまでも、あのひとにあれをしてやった、これをしてやった、という思いが忘れられず「あれ使つてくれていますか？」とか「おいしかったですか？」などと質ねてみたり、第三者にもそのことを恩きせがましく語つたりするものです。

そのところを良寛さまは「くれてのち、人に語る」のは止めよう、何かをさしあげる、また行為としてやつてあげる、そのことをあとなつていつまでも口にするのではないようにと、いましめておられます。いただいた御恩は生涯忘れてはなりません、してさしあげたことはその場で忘れることです。

相手によつて言動を変える人

一、下僕をつかうに、言葉のあらき

相手によつてガラリと態度を変える人がいます。弟子とか使用人とかの目下の者に、居丈高な口調で用事を言いつけたり、小言を言つたりする人がいます。

そつう人に限つて、向きを変えたとなんに、
「これはこれは先生さま、おんみずからお出でましくださいまして、まあまあいつもお美しく遊ばして……。さあさあ、こちらへ」などと、齒の浮くようなお上手をいいます。

道元禪師の言葉に、「物を遂つて心を変じ、人に順いて詞を改むるは、これ道人に非ざるなり」というのがあります。

つまり、物や人によつて心の向けようや言葉づかいを変えるのは、道に生きる人ではない、ほんとうの人間ではないとおつしやるのです。先輩であろうと後輩であろうと、自分にとつて大切な人であろうと不利な人であろうと、全く同じ姿勢で対せよ。

さらにこれは、人に対してばかりではない。物に対しても事柄に対しても、それによつて態度を変えるなどもおつしやつておられます。人によつて態度を変えるなどというのは、むずかしいことではありませんけれど、よくわかります。

ところが物や事柄に対しても同じ姿勢で接してゆけということは、これはもつとむずかしいですね。たとえば百万円の茶碗も百円の茶碗も全く同じ心で大切に扱い、菜っ葉汁をつくる時もロブスターのスープを作る時も同じ真心をこめて料理せよとおおせられる。

病氣に対する時も健康に対する時と同じように、金になる仕事も損する仕事も、あるいは着替えをする時、人が見えないようがいまいが、全く変わりなく肌を見せないようにつつしみ深くやれと示しておられます。

良寛さまのきまこまい自戒の思いに驚かされると同時に、九十カ条のどの項目を見てもすべて落第でしかない私であることに気がつきます。

平家物語

— 祇園精舎 —

東区 矢野 淑子

鎌倉初期の軍記物語二二巻

作者は、信濃前司行長しなののぜんしじゆながといい、あるいは葉室時長はむろの時長といい、平大納言時忠ひらのののぶと言われるが、確かではありませぬ。

平家滅亡の後、各所に伝わる実戦談は断片的に、当時の琵琶法師によって、語られています。

後鳥羽院の御代、文人としての行長と琵琶法師生仏なまふだとが、叡山の天台座主慈鎮和尚じしん（慈円）の、保護のもとに、寺院を背景として「平家物語」を、成立させ、歴史的記録的なものと、語り物語なものと、仏教的なものとの、二つを結合されたといわれ、建久（一一九〇）―承久（一二二二）成立されました。

この、祇園精舎は、仏教の因果説と無常觀を基調として、平家の栄華と没落とを描いたものです。

和漢混浴文わんかんこんよくの一大叙事詩で「平曲」として、琵琶法師に語られ、後代の文学に、多大の影響を与えています。それらは、皆様もよくご存じのことと思います。

〔本文〕

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。

沙羅双樹の花の色、盛者必衰のこわりをあらわす。

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、偏ひとへに風の前の塵ちりに同じ。

〔通釈〕

昔、印度にあつたという祇園精舎の鐘の音は、万物は儂はかなく、うつりかわっていくという響がある。

釈迦が入滅した時、白色にかわつたという沙羅双樹の花の色、勢の盛んな者も、必ず衰える時があるという、人生の道理を示している

この鐘や花の色が、あらわしている通り驕おごりたかぶっている人も、長い間は続かないのである。

ちようど、ただ、春の夜の夢のように短く儂いのである。

勢のあつた者も、一時は栄えても、ついには滅んでしまい、まるで、風の前の塵のようにたわいもなく、儂いものである。

鎌倉時代は、王朝の時代をなつかしむ気持ちから、多くの物語が、作られています。この「平家物語」は、軍記物語の中でも最高傑作と言われています。

文章の一節一節も、人々を導くための教えを、平易な言葉で記してあり、分かりやすく伝わってきます。

そして、人間の辿るであろう一生の悲哀を、実に見事に表し、私どもの胸を深く突くところでもありません。

人は、百歳・二百歳生きても、これから、何億と続く宇宙では、人間の生きた証はほんの小さい点でしかありません。

それ故、それぞれ、与えられた命は、大切に、驕りたかぶることなく、自分らしく、真面目に人生を終えることこそ、人生の道理を歩んだと云えます。

人はみな小さい点を世に残せり
極まるまでの短い証を

淑子



ぼくの犬の名は ラッキー



ボーの僕たちを持って余
していたらしい、そんな
時一寸したご縁で副
住職さんに飼われるこ
ととなって、昨年八月
末にママに連れられて
禅昌寺にきた次第。

この家庭に、もらわ
れて来た頃は戸惑うば
かりだった。方丈（住
職）の孫二人は、僕を
弟の如く遊び相手とし
てかわいがってくれて
いる、これを幸せって
言うのかな！

ところが方丈はお寺
には犬を嫌う人・いろ
んなアレギー等があ
る、多数の方が出入り

とつきまとうと、方丈の雷が落ちる、
そのたびに「だつてかわいそうじゃ
ん！」と可愛い孫達に言われると、
方丈はしかめ面をしながら「毛を落
とすな、お尻をふけ、清潔にしろ」
等とうるさく言うのである。

だから僕も精一杯気を遣ってウ
ンチをすると、項垂れながら上目す
かにすり寄って「すみませんしち
やった、拭いてちょうだい」と仰
向けに横たわるのである。するとそ
ばにいる人が良し良しとお尻を拭い
てくれるのである。

今年お盆過ぎから方丈は、なん
の風の吹き回しか朝のお勤めがすむ
と、ほとんど毎朝、僕を連れて散歩
を始めたのである。僕は嬉しくて、
嬉しくて息せき切って方丈の手を引
つ張るのである、「こらこらあわて
るな、もう少し毅然と歩調を整えて
歩け」とこれまた、うるさいのであ
る。距離にして約三キロメートル少々
を四十五分程、高低差約六十メート
ル、帰りの急な坂道を登るのは僕に
とっては大変つらいのだ、一寸休ん
でくれないかと上目使いに方丈の顔
を伺うのだが、僕のそんな気持ちは
お構いなしに、大股で力強く登って
ゆくのだ、寺に帰るとタライの水で
汚れた足やおなかからお尻まで洗つ

てくれて、僕専用のバスタオルで全
身をマッサージュしてくれる、ブラッ
シングで散歩は終わりだ。方丈も大粒
の汗を流して気持ちよさそうだ。

散歩中のことだが、大型・中
型・小型犬を交えてご主人様に連れ
られて多数の仲間と行き交う、方丈
は行き交う何方とも「おはようーご
ざいます」と軽やかな声をかけてゆ
くのだが、ある日から飼い犬の糞の
後始末をしない飼い主には挨拶をし
なくなつた。

どうやら無言で己のマナーの悪
さに、気づかそうとしているようだ
である。方丈がつぶやくのである。飼
い犬を連れて散歩する半数近くの飼
い主が、太田川の土手の草むらをワ
ンちゃんのトイレと勘違いしている
ようだ、と、「ふんがい」している。

つい一週間程前、土手の草を草
刈り機で刈っていたが「ふん塵」が
まっていた。

そんな飼い主に飼われている、
我が種族がみすばらしくかわいそう
に見えた。

僕は少々こうるさいが
本当は優しいお方に飼われて
「ラッキー」だ。

僕の名前はラッキーだ、平成十
六年四月号の、この誌面に既に登場
している。僕が飼われている寺の孫
娘の作文中に「ラッキー早くおい
で！」と結ばれていた誌面があつた
ことを、皆々様のご記憶に在れば幸
いだ、僕はその作文が書かれた三年
後、平成十八年六月二十二日東京で
生まれた。

生まれたときは二匹の兄妹で、
当時の飼い主は元氣者で、あばれん
目目には姉弟について居間や食堂へ
えお許しができれば、しめたものと二
ナアーニ、置いてくれることさ

えお許しができれば、しめたものと二
目目には姉弟について居間や食堂へ

ラッキーの独り言より

◆道心・趣味の会◆

短歌

● 紅のいろ濃く濃くなりし曼珠沙華
 畦の一むらいたく明るし

● まくら木の辺に枯れそむる草紅葉
 貨車過ぐるとき小さくなくびく

東区 矢野 淑子

俳句

● 十三夜 百間廊下 灯ともさず

● 天の川 哀愁誰れに 語るべき

● 人恋へば 銀漢まみ眸に なだれくる

当山二十一世 故甲田 苔水(良由)

● 睡蓮や 山門の掲示 日々新た

● 幾すじも 星飛び込める 日本海

東区 青笹 俊枝

◆行事報告◆(七月〜九月)

●お盆前伽羅掃除

七月二十九日(日)

多数の参加者を得て早めに終わることが出来ました。

昨年のお掃除から参加者には腕輪数珠を参加証としておくりしております。

●孟蘭盆会法要 八月六日(日)

百六十数名のご家族ずれの参加者で賑わいました。

夫や妻や子に先立たれたご家庭の方々のお参りは何時も変わりないように思います。ご両親をなぐされたご家庭の、施食会法要へのお参りはだんだん遠のいていらつしやるように思います。お子さんやお孫さんの躰や情緒教育の為に是非ご一緒にお参り下さい。

●お月見コンサート「Tsukimi in 寺」 九月二十九日(土)午後六時半〜

今年NHK交響楽団ファゴット首席奏者、広島基町高校出身の岡崎耕治様、ピアノ岡崎悦子様ご夫妻と大代啓二先生のフルートで荘厳な三重奏は秋の虫の音をバツクコーラスに参加者四百名ほどが、心洗われた一時でした。



第7回「Tsukimi in 寺」コンサート

●青山俊董老師講演会 九月三十日(日) 午前・午後

前日のお月見コンサートに続いて前夜から泊まり込みの参加者もあり、午前午後延べ百四十人ほどの参加者が法悦に浸った一日でした。

◆行事案内◆(十月〜十二月)

●大本山永平寺・奥飛騨・世界遺産 白川郷の旅

十月十七日(水)〜十九日(金)
定員まで、まだ数名の余裕があります。

●十一月三日(土曜日祭日)

年度当初、登山を予定していましたが、他の行事が入り延期いたします。追ってお知らせいたします。

●臘八摂心坐禅会

十二月一日〜八日(朝まで) 午前六時より一炷・午後七時より二炷
(年内の坐禅会は八日の摂心終了をもってお休みします。)

●新春坐禅会

平成二十年元旦 午前八時より

●新年のご祈禱法要

平成二十年元旦 午前十時より
檀信徒皆様の一年のご無事を祈願する法要です。お参りされた方にお札を差し上げます。
(古いお札をご持参下さい。)

※お寺の寺務は正月五日より通常に戻ります。

■毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の予定 午後一時から

※お抹茶と和菓子を楽しみに暮らしてみたい方、ぜひご参加下さい。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

■毎週定例行事

●暁天坐禅会 月曜日〜金曜日

毎朝午前六時〜六時四十分まで

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会
終了八時半

●婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会
終了三時(第一金曜日のみ坐禅の後、写経・茶話会)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。